#変身チャレンジ！

宮下恵茉／作
U-pa／絵

講談社 青い鳥文庫

もくじ

1 わたしの秘密の遊び …… 4
2 ぼっち、最高！ …… 12
3 バレちゃった……!? …… 21
4 差しだされた右手 …… 33
5 わたしの才能 …… 50
6 白の妖精 …… 62
7 水無瀬くんの別の顔 …… 75
8 見えない壁 …… 92
9 わたしがミューズ? …… 106
10 小池さんの涙 …… 129
11 まさかの炎上 …… 145
12 高等部に潜入！ …… 157
13 自信が持てなくて …… 165
14 新しい世界へ …… 179

おもな登場人物

メイクやファッションで変身！

佐藤杏

シャルマン学園中等部1年生。四姉妹の末っ子。存在感の薄い超地味女子だけど、メイクやファッションで別人に変身できちゃう！

水無瀬怜央

シャルマン学園中等部1年生。LEO名義で俳優の仕事をしている。将来の夢は映像作家になること。

甲斐亜嵐

シャルマン学園高等部1年生。俳優兼モデル。怜央の事務所の先輩。

小池梨々花

シャルマン学園中等部1年生。杏と同じクラスで、一番目立つグループ（一軍女子）のメンバー。

1 わたしの秘密の遊び

中学校に入学して一か月がすぎたころ。
教室の座席表を見て、あれっ？　と思った。
また、わたしの名前がない……！
しかたなく、プリントを持って先生のところに言いに行くと、先生はわたしの顔と座席表を見くらべた。
「ごめんなさい、加藤杏さん。訂正しておきますね。」
申し訳なさそうに、謝ってくれた。
けど、先生、まちがってます。
わたし、加藤じゃなくて佐藤なんですけど……！
（あ〜あ、中学生になっても同じかあ。）

わたしの名前は、佐藤杏。
地味で存在感が薄いせいで、いつもこんなふうに、いないことにされちゃったり、名前をまちがえられちゃったりする。
家族ですら、集合写真でわたしを見つけられないくらい。
もちろん、みんな、わたしにいじわるしてるわけじゃない。
とにかく、わたしの見た目が地味すぎて、覚えてもらえないみたいなんだよね。
……なんていうと、かわいそうって思われるかもしれないけど、わたしは地味でよかったって思ってるんだ。
だって、目立たないおかげで、友だち同士のめんどくさいことにまきこまれなくてすむし、授業中、先生にあてられずにすむ。
それと、もうひとつ、地味だからできることがあるの。
それはね……。

バターホワイトのブラウスと、ストロベリーピンクのエナメルバッグ。

リボンでくしゅっとなったシャーリングスカートも、かわいい！
夏物がそろった店内を、見て歩く。
「お客さま、気になる商品があればお声がけください。」
ショップのおねえさんに声をかけられて、
「はーい、ありがとうございます♡」
にっこりほほえみかえす。
今日のわたしは、涙袋ぷっくりで、あざかわコーデの愛されガール。
歩くたびにゆれるチュールのスカートに、みんなが振りかえる。
ここは、今、女子中高生に大人気のファッションブランド『バニラムーン』。
ふだんなら、こんなおしゃれなショップにひとりで入るのは、とっても勇気がいるんだけど……。
どうどうと入ることができたのは、今日のわたしが別人だから。
実はわたし、ヘアメイクとファッションで、別人になれちゃうんだ♪

わたしには、年の離れたおねえちゃんが、三人もいる。
だけど今は、三人とも家を出ていて、わたしはひとりっ子状態。
ママとパパは、仕事が忙しくて、夜おそくまで帰ってこない。
ごはんは近所に住むおばあちゃんがたまに届けてくれるけど、家では基本、ひとりでいる。でも、それをさみしいなんて思ったことない。
むしろ、ぼっち最高！　って思ってる。
昔からひとり遊びが好きだったわたしは、ぼっちのほうがのびのびできて、ラッキー！　って思ってるんだ。

いつからこんなこと始めるようになったかっていうと、たぶん小学校低学年のころ。
ひとりで家にいて、あんまりひまなので、おねえちゃんたちの部屋へ、そっとしのびこんでみた。
そこで、机の上にいろんな種類のコスメがあるのを見つけたんだ。
ピンクのマニキュアに、ブルーのマスカラ。

にじいろのフェイスパウダー。
おねえちゃんたちがふだんメイクしてるのを見てたから、使い方は知っている。
まつげのすきまを埋めるようにアイラインを引いて、キラキラのグリッタージェルで涙袋をぷっくりさせて……。
まねしてやってみたら、けっこう上手にできた。
それがおもしろくて、今度はクローゼットやタンスから服を引っぱりだしてみた。
おねえちゃんたちは三人とも、それぞれ服の好みがちがうから、スクールガール系、ブロケットコア系、バレエコア系っていろんなタイプの服がそろってるんだよね。
ついでにヘアスタイルも変えてみようと、動画を見ながらアレンジしたり、おねえちゃんたちの部屋にあったウィッグをつけたりして、遊んでたんだ。
そして、ふと気がついた。
(あれ、わたし、別人になってない??)
ワンピにミニスカ、トラックパンツ。
クリアめがねにロープポニー。

土台が地味なおかげで、メイクやヘアスタイルやファッションを変えたら、別人みたいになっちゃうことに気がついたんだ！

それからしばらく、別人ごっこにハマってたんだけど。

今度は、見た目だけじゃなくてしぐさやしゃべり方も変えてみたら、もっとおもしろいんじゃないかって思いついた。

動画配信でいろんな映画やドラマを見まくって、人気の女優さんやアイドルのしぐさやしゃべり方を研究した。

上目遣いにしてみたり、きゅっと口角を上げてみたり。

そしたら、それを外でも試したくなっちゃって……。

あるときは、つやつやのストレートロングの偏差値高めのスクールガール風。

またあるときは、ゆるめに巻いたヘアアレとフリルとリボンで王道あざとモテガーリー。

はたまた今度は、ショートカットのウィッグで古着ジェンダーレス。

放課後や学校が休みの日、いろんな女の子に変身して、お目当てのおいしいスイーツを食べるのがわたしの趣味。

おばあちゃんですら、別人に変身したわたしと道ですれちがっても、気づかない。

（変身チャレンジ、大成功〜！）

この秘密の遊びに、今、めちゃくちゃハマってるんだ♪

2 ぼっち、最高！

バニラムーンで、ほしかったヘアアクセをおこづかいで買ったあと。
前から行きたいなと思っていた、カヌレが人気の店によりみちすることにした。
ラズベリーのカヌレとミルクたっぷりのカフェラテを、スマホで撮影してから、新作コスメをチェックしていたら……。
「すみません、となり、いいですか？」
店内に入ってきた四人組の女の子たちに声をかけられた。
「あ、どうぞ。」
顔を上げて、飲みかけていたカフェラテを思わずブーッとふきそうになった。
（ヤバ！　小池さんたちだ……！）
となりのテーブルに座ったのは、同じクラスの小池梨々花さん、それから足立さん、広

瀬さん、八木さんだったっけ……。
四人は、クラスでも一番目立つグループの一軍女子だ。
わたしとはちがう世界に生きてる『あっちの国』の人たち。
ふだん、ぜんぜん関わりがないけど、小池さんは教室で、わたしのとなりの席に座っている。
いくら変身していても、さすがにこの距離だと気づかれちゃうかも。
心配になってチラッと横目で見たら、小池さんとばっちり目が合ってしまった。
あせって視線を外したら。
「ねえねえ、となりの子、めっちゃかわいくない？」
「ホントだ。」
「モデルだったりして。」
四人がこそこそ小声で話してるのが聞こえた。
（……え？　かわいい？　もしかして、わたしのこと……!?）
おそるおそる視線を戻すと、今度は四人全員とばっちり目が合ってしまった。

（はわわっ、今度こそ、バレちゃったっ!?）
あせって下を向くと、
「やっぱ、絶対モデルだよ。」
「あんなかわいい子、こんなとこでなにしてんだろうね。」
（よかった〜、バレてない。……けど、モデルだって！　えへへ、うれしいな♪）
ホッとして、カフェラテを飲むふりで、小池さんたちの会話に耳をすます。
ぬすみぎきはよくないって、もちろんわかってる。
だけど、わたしには、特定の友だちがいなくて（ちょっと話しかけるくらいの子はいるよ!?）、クラスで今どんなことが話題になってるか、よくわからないんだよね。
だから、情報収集ってことで。
「ね、水無瀬くんって、次はいつ学校に来るんだろうね。」
「ホント。せっかくあのＬＥＯと同じクラスになれたと思ったのに、入学してから数回しか来たことないんだもん、がっかりだよね。」
「水無瀬くんって彼女いるのかなあ。」

（あ、そういえば、うちのクラスには有名人がいるんだっけ。）

わたしの通うシャルマン学園は、私立の中高一貫校。
入学してから知ったんだけど、学内には何人か芸能活動をしている人がいるみたい。
同じクラスには、ＬＥＯ名義で活動をしている水無瀬怜央って男子がいる。
小さいころから子役として活動してたらしいけど、最近、ドラマや雑誌にもよく出ていて、ネクストブレイク俳優って騒がれてるらしい。
けど、仕事が忙しいらしくて、数えるほどしか学校に来たことがない。
ちなみに高等部には、今、女子中高生に一番人気の俳優兼モデル・甲斐亜嵐って先輩もいるようだ。水無瀬くん以上に学校に来ないらしくて、見かけたらラッキーなレアキャラなんだって。
前に一度、水無瀬くんが登校してきたときのこと。
変身メイクの見本にならないかと思って、授業中、自分の席からまじまじと観察したことがある。

遠くから見てもまつげが長いのがわかったし、クラスの誰よりも顔が小さくて、明らかにただものじゃない感じがした。

なんていうか、全身がキラキラしていて、芸能人オーラがすごいんだよね。

しかも、あんまり学校に来てないのに、先生にあてられてもスラスラ答えて、勉強もできるみたい。

まさに、『あっちの国』の王子様って感じ。

肌がめちゃめちゃきれいで、なんのコスメを使ってるんだろうと、つい前のめりになってしまったら、ガッシャーンと大きな音を立て、うっかりペンポーチを落としてしまったんだ。

「ひゃっ、すみません。」

あわてて中身をかき集めようとしたら、水無瀬くんは席から立ち上がり、教室のすみにころがっていったわたしの消しゴムを、わざわざ拾って持ってきてくれた。

「はい、これ。」

「あ、ありがとうございます……！」

さすが芸能人。ただ消しゴムを拾っただけなのに、めちゃくちゃ絵になる……！

そして、いい人！

たぶん、世の中の女の子たちは、ここで「LEOくん、すてき……！」と恋に落ちるんだろうけど、住んでる国がちがいすぎるわたしは「すごいなあ、あっちの国の人は。」と感心するだけで終わった。

（なるほど。一軍女子の話題って、こんな感じなんだ。やっぱりキラキラしてるなあ。）

わたしには関係ない話だったな、と納得して、またカフェラテを片手に、スマホをいじりはじめた。

そのタイミングで、小池さんが「トイレ行ってくるね。」と言って席を立つ。

すると。

「ね、梨々花って、絶対自分のことかわいいって思ってるよね。」

「わかる。わたしが『水無瀬くんって彼女いるのかなあ。』って言ったら、ちょっと笑ってなかった？」

「見た見た！　自分が彼女になれるとでも思ってんじゃない？」

「性格悪いよね。」
残った三人が、口々に小池さんの悪口で盛り上がりはじめて、またカフェラテをブーッとふきそうになった。
（ええっ？　今さっきまで仲良くしゃべってたのに、なんで??）
となりで聞いていたかぎり、小池さんはなにも悪いことはしていなかった。
ただ笑って、みんなの話を聞いてただけだ。
なのに、そこまで事実をひん曲げて、悪口につなげる三人のほうが、よっぽど性格悪いと思うけど。
「ごめんね～。」
小池さんが戻ってきた。
「ううん～、ぜんぜん！」
三人は、笑顔で小池さんを迎え入れ、なにごともなかったかのように、またにこやかにおしゃべりを始めた。
その切り替えの早さに、

（コッワ、一軍女子……！）

わたしはとなりで、がたがた震えながら冷めたカフェラテを飲みほした。

中学に入学するとき、メイクの力を借りて、一軍女子にもぐりこむって作戦も、ちょっとだけ考えたことがある。

だけど、やめといて本当によかった……。

こんなにオソロシイ人間関係、わたしには無理ゲーすぎる……！

あっちの国の人たちは、友だちとの関係がどうしたとか、カッコいい男子がどうしたとか、いろいろ大変そう。

やっぱりわたしは、ひとりでいるほうがいいや。

だって、ひとりでいたら、めんどくさいことなんてなんにもない。

好きなときに好きなことができるし、誰かに合わせて気持ちを乱されずにすむ。

ぼっち、最高！

3 バレちゃった……!?

（ええっと、このお店はどこにあるんだっけ。）
立ちどまって、スマホをチェックする。
今日のわたしは、大きなリボンつきブラウスと、ネイビーのミニスカを合わせた大人めコーデ。
ソール高めのローファーと、エナメルのショルダーをカカオブラウンでそろえたのがポイント。
髪は、ミルクティーベージュのロングヘア。
もちろん、おねえちゃんのウィッグだ。
休日の今日、ほしかったコスメと服や小物をゲットしてきたところ。
といっても、どれもおこづかいで買えるプチプラのものばっかりなんだけど。

せっかく街まで出てきたんだから、なにか甘いものでも食べて帰ろうと地図アプリで確認したら、この近くにチーズケーキ専門店があるって表示された。
一番人気のコーヒーチーズケーキは、一日限定十個なんだって。
なにそれ。
絶対食べたいやつ。
早く行かなきゃ、なくなっちゃう！
スマホをしまって、歩きだす。
ひとりでカフェに入れないって子もいるらしいけど、わたしは平気！
むしろひとりのほうが気兼ねなく写真を撮れるし、時間を気にせずまったりできる。
（このあたりのはずなんだけどな。）
もう一度地図を見たら、お店は公園の向こう側にあるみたい。
公園をつっきったほうが近道だ。
あとちょっとというところで、すごい人だかりが見えた。
（もしかして、並ばなきゃ入れないくらい人気なのかな。限定のコーヒーチーズケーキ、

なくなってたらどうしよう。）

心配しながら、近くまで行ったところで、ハッと息をすった。

人だかりのまんなかにいるのは、同じクラスの水無瀬くん!?

「LEO〜！」

「やっぱ、カッコいい！」

女の子たちは、きゃあきゃあ言いながら、水無瀬くんを取りかこんでいる。

「プライベートだから、写真は撮らないで。」

めがねをかけた水無瀬くんが、両手で顔をかくして頼んでるのに、女の子たちはかまわずスマホを向けている。

きっと、水無瀬くんが普通に歩いていたら、ファンの子たちに見つかって、取り囲まれてしまったんだろう。

めがねで変装したつもりなのかもしれないけど、そんなので、あの芸能人オーラを消せるわけないのに。

気がつくと、騒ぎに気づいた人たちがどんどん集まってきて、さっきよりもずっと人が

増えている。
その中心にいる水無瀬くんは、本気で困っているみたいだ。
（助けてあげようかな……。けど、早く行かなきゃ限定のコーヒーチーズケーキがなくなっちゃうし。）
そこで、ふと思いだす。
水無瀬くん、前に、わたしの消しゴムをわざわざ拾ってくれたよね……。
なのに、困ってる水無瀬くんを無視してチーズケーキを優先させるって、人としてどうだろう？
それに、助けたところで、わたしがクラスメイトだなんて気がつかないよね。
席が近い小池さんですら、わたしがとなりに座っていてもまったく気づかなかったくらいだし。
そもそも、水無瀬くんは、ほとんど学校に来てないんだから、存在感ゼロのわたしのことなんて覚えていないはず。
（だったら、ここは助けてあげなきゃ！）

わたしは、公園の木のかげにかくれてから、すっと息を吸いこんだ。
「見て！　あっちで甲斐亜嵐の撮影してる！」
大声で叫んだら、
「え、うそ。」
「ＬＥＯだけじゃなくて、亜嵐もいるの？」
水無瀬くんを囲んでた子たちの視線が外れる。
（今だ！）
わたしは、今日買ったばかりのキャップをふかくかぶり、すばやく水無瀬くんのそばにかけつけた。
「こっち来て！」
小声で耳元にささやき、腕を引く。
いきなりそんなこと言って、あやしまれるかと思ったけど、水無瀬くんは意外なほど素直にわたしのあとをついてきた。
「あ！　ＬＥＯが逃げちゃう！」

誰かの声を背中で聞きながら、走ってそばにあったコンビニの裏に回る。
そこから、細い路地を右に左にいくつも曲がり、ようやく誰もいない遊歩道に出た。
「ここまで来たら、大丈夫かな。」
はずむ息を整えて、つぶやくと、
「なんで助けてくれたの？」
水無瀬くんが、ずれためがねのまま、とまどった表情でたずねる。
「その前に、ちょっとごめん。」
そう断りを入れてから、持っていたバッグを開けた。
今、手元には、ちょうど買ったばかりのコスメがある。
これを使えば、今よりちょっとはマシに変装させてあげられるはず！
「ＬＥＯだってこと、みんなにバレちゃ困るよね。だったら、わたしにまかせて。」
そう言いながら、取りだしたヘアクリームを両手につけ、水無瀬くんの髪にもみこんでいく。
「これも、取るね。」

めがねを外して、アイブロウペンシルでまゆをかき、パウダーをまぶたにのせた。
コームで髪をなでつけて、シャツのすそを思いっきりボトムに押しこむ。
ついでに、ボタンも首元までしっかりとめ、最後にめがねを戻したら……。
「はい、できあがり。」
わたしの言葉に、されるがままだった水無瀬くんがハッと意識を取り戻して、自分の姿を見た。
「うわっ、なにこれ。」
水無瀬くんは、そばに停まっていた黒いワンボックスカーの車体にうつる自分の姿を見てぼうぜんとした。
そりゃあそうだ。
カッコいいLEOとはぜんぜんちがう、ザ・まじめな中学生ファッションに変身してるんだから！
「見る？」
わたしが手鏡を渡すと、水無瀬くんは自分の顔をさわりながらつぶやいた。

「すごっ、俺の顔が別人みたいになってる……！」
「まゆの形を変えて、まぶたをメイクでわざとはれぼったくさせたの。あとシェーディングで顔のりんかくも変えてみたし。」
「ええっ、あの短時間で？」
おどろく水無瀬くんに、
「こんなの、簡単だよ。家に帰ってしっかり洗ったら元に戻るから。そのメイクのままいれば、バレずに家まで帰れるよ。」
そう説明していたら、わたしたちと同じ年くらいの女の子たちの集団が、こっちに向かって歩いてくるのが見えた。
水無瀬くんの表情がかたまる。
「亜嵐なんて、いなかったじゃんね。」
「っていうか、ＬＥＯ、いったいどこ行っちゃったんだろ。一瞬で消えちゃって、びっくりしたよ。」
「ホント！　せっかく会えたと思ったのに〜。」

女の子たちは文句を言いながら、わたしたちの前を通りすぎていった。
「ヤバ。本当に気づかれてない……。」
水無瀬くんがおどろいたように、もう一度鏡の中の自分を見る。
「でしょ？　わたしの変身メイクのおかげだよ？」
わたしは腰に手をあて、えへんと胸をはった。
「あなた、芸能人なんでしょ？　人がおおぜいいるところに行くなら、今度からはしっかり変装したほうがいいと思うよ。そんなめがねだけじゃ、意味ないし。」
わたしが言うと、水無瀬くんは、ムッとした顔で口をとがらせた。
「なんで出かけるだけで、変装しなきゃいけないんだよ。俺はただ、このあたりにおいしいコーヒーチーズケーキがあるって聞いたから、探しに来ただけなのに。」
その言葉に、ハッとする。
（そうだ。コーヒーチーズケーキ、忘れてた！）
「ごめん、返して。」
わたしはひったくるように水無瀬くんの手から鏡をうばうと、

「じゃ、わたしはここで！」
くるっと向きを変え、早足で歩きだした。
すると。
「ちょっと待って。」
うしろから水無瀬くんがわたしを引き留めた。
（もしかして、わたしのこと、おしゃれなイケてる女の子だと思ってる!?）
変身しているとき、こういうことがよくある。
「モデルになりませんか？」とか、「お茶でも飲みませんか？」とか。
だけど、ごめん。
今は、めちゃくちゃ盛ってるけど、本当のわたしは、存在感ゼロで誰にも気づいてもらえない地味女子。
お茶なんてのんびり飲んでたら、さすがに正体がバレてしまうかも。
「ごめんね〜、ちょっといそいでるんだ。」
いつものようにモテ女子になりきって、手をひらひらと振り、そのまま、歩きだそうと

したら。

「きみ、佐藤さんだよね？　同じクラスの。」

その言葉に、サーッと顔から血の気が引く。

（……へっ？　なんで？　わたしってバレてる!?）

「ちっ、ちちちちち、ちがいますけど。」

思わず声が裏返る。

あせっていることに気づかれないよう、背中を向けてそのまま行こうとしたけれど、足音が近づいてきて、ポンと肩をたたかれた。

おそるおそる振りかえると、水無瀬くんがにっこりほほえむ。

「ちがわないでしょ？　シャルマン学園中等部一年二組出席番号十一番の佐藤杏さん。」

よどみない水無瀬くんの声に、がっくり肩を落とす。

（……うそ。なんでバレちゃったの!?）

4 差しだされた右手

十個限定のコーヒーチーズケーキは、奇跡的にまだ残っていた。

「うわっ、うまそう！」

運ばれてきたチーズケーキに、水無瀬くんがうきうきと手を伸ばす。

さっき助けてもらったお礼にって、このカフェにさそわれた。

「けっこうです。」ってはっきり断ったのに、「じゃあ、今度学校に行ったときに、みんなの前でお礼を言えばいい？」って言われて（というか、おどされて）、しぶしぶついて来たんだけど。

「……あれ、食べないの？　めっちゃうまいよ？」

すでに一口食べおえた水無瀬くんが、不思議そうにたずねる。
まだ、まじめな中学生に変装したままだから、カフェにいる他のお客さんたちは、水無瀬くんがLEOだってことに気がついていないみたい。
それはいいんだけど。
「食べるよ、食べますよ！」
わたしは、やけくそでチーズケーキを食べた。
ほろにがいコーヒーの香りと、クリーミーなチーズの酸味が口の中いっぱいに広がって、おいしい！
……なんてのんきに感想を言う余裕もなく。
それでもしっかり完食してから、イスに座りなおした。
「……あの、おねがいがあるんですけど。」
「なに？」
今、まさにチーズケーキを口に入れようとしていた水無瀬くんが、手を止める。
「わたしが別人になりきってること、クラスの人たちにないしょにしてもらえますか？」

「どうして？　すごい特技なのに。」
水無瀬くんが、きょとんとして首をかしげる。
「どうしてって……！　わかるでしょ？　だって、ふだんのわたしとぜんぜんちがうし。こんなことしてるってクラスの子たちに知られたら、なに言われるか、わからないじゃないですかあ！」
思わず前のめりになって言うと、
「そうかなあ？　そんなことないと思うけど。」
水無瀬くんは、意味がわからないという表情で、肩を上げた。
「でもまあ、ないしょにしてほしいって言うなら、もちろん、秘密にするよ。」
（よかった〜、いい人で。）
ホッとしていたら。
「そのかわり。」
間髪をいれず、水無瀬くんがくちびるを片方つりあげて、にやりと笑った。
その顔を見て、ぎょっとする。

やばい、これ、悪い人がする笑い方だ……！

「ひとつ、おねがいがあるんだけど。」

（や、やっぱり……！）

人の弱みに付けこむなんて、信じられない。

お金を払えとか言われるんだろうか。

いい人だと思ったから、助けてあげたのにぃ〜！

「な、なんですか？　言っときますけどわたし、お金なんて……！」

半泣きのわたしに向かって、水無瀬くんが言った。

「俺が撮る動画に出演してくれない？」

「……ど、どおが!?」

一瞬、なにを言われたのかわからず、わたしは、あわあわしながらたずねた。

「そっ、ショート動画。こういうの、見たことあるだろ？」

水無瀬くんはそう言うと、くるりと手首を返して、手に持っていたスマホの画面をわたしに見せた。

画面の中では、おそろいの服を着た女の子たちが音楽に合わせてシンクロダンスをしていたり、男の人が意味不明な記録にチャレンジをしていたり、かわいい動物たちがどんくさい失敗をしていたり。

ＳＮＳを見ていたら、タイムラインに流れてくるやつだ。

もちろん、わたしだって見たことがあるし、メイクをするときに参考にしたこともある。

……ちょっと待って。

ということは、もしかして、水無瀬くんが出る動画に、わたしも一緒に出ろってこと？

いくら変身して別人になってるっていったって、そんなの恥ずかしいよ～！

「あのう、わたし、芸能人じゃないんで、水無瀬くんと共演はＮＧっていうかあ……。」

指でバツを作って、もじもじしながら伝えたら、水無瀬くんはけげんそうな顔で、「まさか、ちがうよ。」と秒で否定してきた。

（あれっ、ちがうんだ。）

カーッと顔が熱くなる。

いやいや、わかってましたよ？
だってわたしはシロウトだもん。
けど、そんなにきっぱり否定しなくてもよくない？
かんちがいしたわたしが、ばかみたいじゃん……！
ちょっとムッとしていたら、水無瀬くんが続けた。
「俺は出ない。俺が、佐藤さんを撮るんだ。」
「……はっ？」
わたしは、あんぐり口を開けた。
（なに言ってんの？　この人。）
なんで芸能人の水無瀬くんが撮る側で、シロウトのわたしが撮られる側なの？
それ、なんの罰ゲーム？
そんなこと、できるわけない！
わたしは、ばん！　と、テーブルに手をついて、立ち上がった。
「む、無理です！　ダメです、できないです！」

水無瀬くんは、「え、なんで？」と素できいてくる。
「え、なんで？」じゃないよ。
おかしいに決まってる！
「わたしは普通の中学生です。演技なんてできません。それに、誰が、見ず知らずのわたしの動画なんて見るんですかあ！」
「いや、それはまかせて。俺がばっちりいい動画に仕上げるから。」
「そういう問題じゃないんですってば！　さっきも言いましたよね？　わたしが別人になりきってることをクラスの人たちに知られたら、こ・ま・るん・です！」
バシバシテーブルをたたいて言ってるのに、
「それだけキャラ変できてるんだから、大丈夫☆」
水無瀬くんは、笑顔で親指を立てた。
「『大丈夫☆』じゃない！　だって、水無瀬くんはわたしが佐藤杏だって見破ったじゃないですか～！」
「まあ、それはしょうがないよ。」

水無瀬くんが、涼しい顔でカフェラテをすすった。
「しょうがないって、なんでですか？」
「俺、一度見た人のこと、絶対忘れないんだ。」
水無瀬くんは、手に持ったカップをテーブルに置くと、おもむろにくちびるにひとさし指をあてた。
「知ってる？　人のくちびるの模様って、しわや溝のパターンが一生変わらなくて、同じ形の人はいないって言われてるんだ。それから。」
今度は、自分の耳に指をあてる。
「耳の形も、人によって大きさ、カーブの形、穴の向き、角度がちがう。だから、いくらメイクをしたって、同じ人ってわかっちゃうんだよね。」
水無瀬くんはそう言ってから、また、ぱくりとチーズケーキを食べた。
「うん、うまい！」
もしも水無瀬くんがワンコだったら、めっちゃしっぽ振ってそう。
しあわせそうに、口をもぐもぐさせている。

見た感じ、クールな人かと思ってたけど、甘いものが好きなんだ。
ちょっと意外。
……って、今はそれどころじゃなくて！
「た、たとえそうだとしても、わたし、教室で空気みたいな存在なのに、どうしてわたしのくちびるとか耳の形、覚えてるんですか？」
わたしの質問に、
「……うーん、ふだんから、いろんな人の姿やしぐさを観察するのがくせ、だから？」
水無瀬くんはあたりまえ、みたいな顔で答えた。
（……なに言ってんの、この人。それ、どんなくせよ。なんかこわいんですけど！）
わたしが引いてるのにも気づかず、水無瀬くんは続ける。
「それにしても、さっきは助かったよ。ありがとう。まさかあんなに人が集まるなんて、思わなくってさ。」
いやいや。あなた、芸能人でしょう？
どんだけ無防備なのよ。

ツッコミどころが多すぎる。
「佐藤さん、見た目だけじゃなくて、しぐさや話し方まで変えてたでしょ。あそこまで自然に別人になりきるなんて、なかなかできないよ。」
水無瀬くんの言葉に、わたしはびくっと肩を震わせた。
（そこまでバレてるんだ……。）
「で、でも、水無瀬くんは芸能人でしょ？　だったら、同じ芸能人のお友だちに頼んだらいいじゃないですかあ。わたしなんかよりずっと演技も上手だろうし。」
「悪いけど、俺、芸能人に友だちなんてひとりもいないんだ。いつもぼっちだから。」
（え、そうなんだ。）
わたしと同じだ♪　ってちょっと親近感を持ちそうになったけど、いやいや、そんなわけない。
相手はなんたって、ネクストブレイク俳優。
簡単に、だまされてはいけない。
「そんなわけ……。」

「俺、将来、映像作家になりたくて。」
水無瀬くんは、かぶせぎみに続けた。
「けど、長い映像を撮るのって機材をそろえなきゃいけないし、ひとりじゃできない。なにより、すっごいお金がかかるんだ。今、俳優の仕事をしているのは、そのお金をかせぐため。事務所にはないしょにしてるけど。」
「……ふうん。」
まだ中学生なのに、そこまでやりたいことがはっきりわかってるなんて、水無瀬くん、すごいなあ……。わたしはそんな先のことなんて、考えたこともない。
自分が将来、大人になることすら信じられないのに。
「夢に少しでも近づきたい。そのために、今できることは、なんでもやりたいんだ。だから……。」
そこで、水無瀬くんは、めがねを外してわたしを見た。
「他の誰かじゃ、意味ない。俺は、佐藤さんを撮りたいんだ。」
どきん

その言葉に、胸が大きな音を立てる。
他の誰かじゃなくて、わたしを撮りたい？
そんなこと言われたの、生まれて初めてだ。
いつも誰にも覚えてもらえなくて、わたしなんて、いてもいなくても気づいてもらえないってずっと思ってたのに。
「わたし……。」
『やります。』と言いかけて、ハッと意識を戻す。
（……あぶない、あぶない。さすがは『あっちの国』の王子様、あやうくうなずきそうになった……！）
「で、でも……！」
あわてて反論しようとしたら、
「これ、見て。」
水無瀬くんが、またスマホを差しだした。
始まった動画に、目をみはる。

緑の葉が風に揺れる。
こもれびが川の水面に落ち、砕けた光がはじける。
ふわりと落ちた一枚の葉が、水に流されていく。
光と影、木々の緑。
水の流れていく音と、遠くで聞こえるこどもたちの歓声。
そのまま画面が空に向くと、真っ白な飛行機雲が青空に直線を引いていた。
たった数秒の映像。
なのに、その美しさに言葉を失う。
「……これ、水無瀬くんが撮ったの？」
「うん。スマホでだけどね。」
「ええっ？　映画のワンシーンかと思った……！」
「おおげさだよ。」
水無瀬くんが、照れくさそうに画面をタップする。
（すごい！　こんなの、スマホで撮れちゃうんだ……。）

わたしは、もう一度さっきの映像を頭に思い浮かべた。
あんなすがすがしい映像の中に、わたしも入れたら、きっと気持ちいいだろうなあ。
うっとり目をとじかけて、ブルブルと首を横に振る。
やばい。またうっかりうなずきそうになってしまった。
わたしってば、どんだけチョロいの??
これじゃあ、完全に水無瀬くんの思うつぼだ。
甘い言葉にのせられちゃ、ダメだ。
そう思おうとするのに、さっきのここちよい水音がわたしの脳内に流れだす。
あの景色に合うのは、水色のシフォンのワンピース？
ヘアスタイルはゆるく巻いたハーフアップがいいかな？
裸足で川に足をひたして、スカートを揺らすわたしの姿を思い浮かべる。
「頼むよ。佐藤さんの秘密は誰にも言わない。だから、頼む……！」
真剣なまなざし。
こんなの引きうけたら、大変なことにまきこまれるに決まってる。

今の平和な生活だってこわれてしまう。
ぜんぶ、わかってる。
でも。
「無理強いはしたくない。本当にいやなら、断ってくれてもいいよ。けど、ほんのちょっとでもやりたいって思ってくれたのなら、協力してほしいんだ。」
そう言って、水無瀬くんは右手を差しだしてきた。
線が細いのに、意外と大きくてごつごつした手。
この手を、つかんじゃダメ。
ダメだってば！
「……わかりました。よろしくおねがいします。」
気づけば、わたしは吸い寄せられるように水無瀬くんの手をつかんでいた。
「やった……！　ありがとう！」
水無瀬くんはそう言うと、くしゃくしゃの笑顔で、つかんだわたしの手を上下に揺らした。

なにやってんの、わたし。
なんで引きうけちゃうの？
あたたかな手のぬくもりを感じながら、心の中で、もうひとりのわたしがツッコむ。
自分でも、わからない。
でも、やりたいって思っちゃったんだよ……！
（こうなったら、絶対に、バレないようにしなきゃ……！）